

1. 題材名

『世界から画材が消えたなら』

2. 単元の目標

今回の単元では、筆や絵の具などの画材は使えない。その代わりに、木の葉や石、砂などをつかい、その色彩を使って絵画的アプローチをしていく。自然の中の色彩というと、葉っぱは緑、紅葉は赤、石は灰色など、決まったイメージを持ちがちだが、自然には思っているよりもたくさんの色彩がある。それを発見しに行くために実際に木の葉や石を観察しに行き、その中で日の光や影により色の見え方が変わったり、近くで物質を見ると、遠くから物質を見ると色見え方が変わったり、物質一つ一つも多様な色相やトーンが存在することに気が付く。これにより、自然の中には多様な色彩があることを知り、その美しさに気づくことと、決まったイメージを壊し、柔軟なものの見方が出来るようになる視点を養う。

また、授業内では色彩の学習をする。二つ以上の色を組み合わせることを「配色」といい、それを作品制作に活かす。配色には時代や個人差などの違いを超えた、高い普遍性を備えたものも存在している。ここでは、高校ならでの専門性の高い美術の分野の知識を身につけることと、配色イメージを自身の制作の意図に応じて利用できる力をつけることが目的である。(補足：配色は様々なところに隠されている。立ち入り禁止の赤と白の看板はビコロールカラー配色といい、コントラストが高く、誘目性の高い配色である。その他広告、おもちゃ、装丁、あらゆるところに配色が存在し、相手に伝えたいイメージに応じて使用されるものである。配色は世の中に幅広く必要とされるスキルである。)

最後には、環境保全について考えて行く。芸術活動もたくさんの自然からの恩恵を受けており、絵画では黄土、緑土、辰砂(硫化水銀)、ラピスラズリ、珊瑚、胡粉(牡蠣)など。工芸、彫刻では、木材、粘土、漆、藍、夜光貝、絹など。陸上の環境保全がなされなければ、黄土や緑土、木材、粘土などが使えなくなり、海の環境が保全がなされなければ、珊瑚や胡粉などが使えなくなる。このように、環境保全がなされなければ芸術活動は衰退していき、私たちのいつもの生活にもかかわってくるだろう。今回の授業で、環境保全についての問題意識を養う。

3. 単元について

(1) 教材観

・画材には〈色材〉〈支持体〉〈描画道具〉が存在し、絵画制作にはこれらが欠かすことが出来ない。しかしそれらがなくなったとき、どうすれば絵画的なアプローチが出来るのだろうか。方法の一つとして自然に存在するものを活用し、モチーフを構成するということで絵画的なアプローチが出来る。自然を使った芸術ということで、環境芸術の一つ〈アースワーク〉、とくに作家でいえば Andy Goldsworthy との関連性が強く、近代美術との繋がりからインスピレーションが得られる。自然の色彩の豊かさについては、課題設定時期は秋を想定しているため、紅葉の美しさを作品に取り入れることが出来、身近な自然素材の美しさや素

材の良さを触って使って実感できる。

・自然素材を使い芸術表現が出来たことから、授業の締めでは自然界からの芸術的恩恵について話す。今回の自然素材を使った制作活動もふくめ、洋画や日本画では緑土や黄土、辰砂に瑠璃、珊瑚などが使われ、彫刻や工芸では粘土や木材、石材や漆などが使われる。しかし、自然環境保全がなされなければ芸術活動は推定していってしまうということを切り口に問題意識を芽生えさせることが出来ると考えられる。

(2) 指導観

第一次の導入では、絵を描くには何が必要かを問いかける。恐らくは筆や絵の具やキャンバス（紙などの支持体）と答える生徒がいると考えられる。しかし、それらがなくなったらどのように絵画的アプローチが出来るかを考えたとき、木の葉や枝、石、砂利、砂などを使った表現手法ができることが生徒の意見の中から出てくると思われる。そこで、今回の授業では、筆や絵の具などの画材を使わないという縛りを課し、自然素材のみの活動を行う。

展開では、生徒のインスピレーションを刺激するために、自然を使った作品例として、アースワークの作家である Andy Goldsworthy の作品を見せる。彼の作品は木の葉や石を使った色彩のグラデーションや、枝を組み合わせた幾何学的な作品が多くみられ、どのように素材が使われているか、色の使い方からどんな印象を受けるかなどを考える。

自然の中に存在する色彩は、どのようなものがあるかをひとまず考えてみる。そのあと、実際の木や葉等を観察してみる。そこで、思っていたよりも多様な色彩があったということを知る。それを知ったうえで、色相環を頼りに配色を考えて行く。配色は色相のグラデーション、トーングラデーション、軽重感、軟硬感、ダイナミック配色、モダン配色、クリア配色、カジュアル配色、ナチュラル配色、など基本的な配色イメージ法を実際の自然素材を使って学習する。

色彩の学習がすんだのち、配色イメージ法を使い自分が現したいもののイメージを書き出す。制作のテーマは、「自然の中にある音」。外に出て、どんな音が聞こえるかを耳を澄ませて感じ取り、その音を聞いてどこから聞こえてくるのかを想像したり、その音が自分に与える心理的影響をオリジナルの図形として表す。音の聞き方については、校内の木々が生い茂る場所を活用する。まずは立ったまま、座ったまま、動かずに静かに音を聞き、次は歩き回り、音を聞いてみる。その際は足元の地面を踏みしめる感覚にも注意させる。歩くたび、足裏と地面との摩擦で音が生まれるからだ。また、なぜこの作品を作ろうと思ったのかを作者の思いとして考えを書く。作品の大まかな制作計画については、色鉛筆などの画材は使えないので鉛筆で形や色彩の構成方法、素材の使い方などを明確に書いていく。

制作を始めていく。制作では竹熊手や竹箒、軍手や籠を使う。自身の制作計画にのっとり、制作を進める。制作が終わった後は、講評会を開く。講評会はクラスを二つに分け、質問グループと解答グループに分かれる。作品を見て回り、素材の使い方や、配色イメージ法に着目し、どのような美しさがあるに迫って行く。

制作や授業を通したまとめでは、今回の制作は自然素材を使ったことから、芸術における自然界の恩恵や、環境保全がなされなければ芸術活動は衰退してしまうことを伝えて、授業の締めとする。

(3) ESD との関連

○ESD の視点

1. 多様性

自然には本当に多様な色彩が存在する。例でいえば、自然界には日に当たった部分は明度が高い黄みがかって見え、陰になった部分は明度の低い青みがかった色に見える。さらに、それらの色彩を配色することにより、おなじ自然素材を使っている、生徒の考えの数だけ多様な色彩イメージを作り出すことが出来る。

2. 責任性

授業では自然素材を使うことで、生徒は素材の良さを感じる。同じ自然素材と絡めて、芸術活動にはたくさんの自然からの恩恵を受けていることにつなげていき、自然を守らなければ芸術活動は衰退していくことを知る。このことから、自然の恩恵を受けている私たちは、環境を守らなければならないという責任性が生まれると考える。

○ESD で育てる資質能力

1. クリティカルシンキング

自然には、私たちが思っているよりも多くの色彩が存在する。もみじの紅葉の赤だけでも、日に当たっている部分は明度の高い黄みがかった赤色、陰になっている部分は明度の低い青みがかった赤色となる。また、緑から赤に変わりつつあるグラデーションも見受けられるものもあれば、虫喰いや腐食が進み、赤茶けた色の色彩も発見できる。このように、よく観察すれば自身が思っていたよりも本当は多様な色彩が発見できる。またそれらの発見を基に、作品案をより良いものにするための上方修正ができるので、クリティカルシンキングの育成が期待できる。

○ESD で育てたい価値観

1. 自然環境の保全

今回の単元では、自然素材をおもに使用した作品制作をおこなう。自然素材を使ったことで作品をつくる事が出来たということの切り口に、芸術で使う自然由来の道具があることを伝え、自然環境の保全がなされなければ、芸術活動ができなくなる。ここから自然環境の保全の問題意識を芽生えさせる。

○この単元で期待できる SDG s

1. SDG s 14 海の豊かさを守ろう

2. SDG s 15 陸の豊かさを守ろう

自然の豊かさは、芸術にも恩恵をもたらしている。今回の単元で自然素材を使用したこともそうだが、彫刻であれば木彫に石彫、塑像があり、工芸でも木材をつかい、そのほかにも粘土や漆、螺鈿細工の夜光貝、洋画では黄土や緑土、辰砂（硫化水銀の鉱石）、日本画では珊

瑚やラピスラズリなど、多様な自然の恩恵の形が芸術でもある。海水の温度上昇や汚染が続けば珊瑚の紅や夜光貝を使うことが出来なくなり、森林の手入れが行き届かなければ木彫や石彫や粘土、黄土などが使えない。このように、芸術活動は自然の豊かさから恩恵を受けており、環境保全がなされなければ芸術活動は衰退していくということから、自然の豊かさを守るという意識を芽生えさせる。

4. 単元の評価の観点と規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
<p>(1) 自然の中にある決まったイメージの色彩ではなく、多様な色彩を発見することが出来る。</p> <p>(2) 自然の中に見出した色彩を、配色イメージを使用して、自分の作品の意図に合わせて使うことが出来る。</p>	<p>(1) まず、自然の中にどのような色彩があるか、考えていくことが出来る。</p> <p>(2) 自然の中にある多様な色彩を活用し、考えた配色を基に、実際に作品を構成していくことが出来る。</p> <p>(3) お互いの作品を、色彩の構成の活用法や、素材の使い方などに注目して、どのような美しさがあるか、考えることが出来る。</p>	<p>講評会において、作者の生徒と対話的に作品の美しさや作品の制作意図について話すことが出来る。</p>

5. 本時の展開計画

学習展開過程

	学習活動	教師の動き	指導上の留意点
第一時			
1	絵を描くためには、何が必要になるか考える。	パワポを用意する。生徒に投げかける問いをパワポに映す。	
2	画材が使えない状態で美術作品を作るとなると、何をすればいいかを答える。	画材が使えない中、作品を作るには代替品として何をすればいいかを問いかける。	
3	今回は自然素材を使う。 Andy Goldsworthy の作品を見せる。	パワポに作家、作家作品を載せる。	作品の素材の使い方や、色彩の構成の仕方に注目させる。
第二時			
4	ひとまず、自然の中にどん	生徒の意見を黒板にまとめる。	

5	<p>な色彩があるか考える。</p> <p>実際にどんな色彩があるのか、校内を観察して周り、自然の音を聞いて回る。</p>	<p>ここでは指示を通しやすくするため班で行動させる。</p>	<p>遠くから見てみたり、陰影の違いによる色彩の変化に注目させる。気になったものは採集する</p> <p>実際に世の中に使われてる配色イメージを提示する。</p>
<p>第三時</p> <p>6</p> <p>7</p>	<p>色彩の勉強をする。配色には様々なイメージがあることを学習する。</p> <p>自分が造りたいものの計画を立てる。</p>	<p>配色イメージのパワーポイントを映写する。</p>	<p>自分が表現しようとした動機まで明確に書くようにさせる。</p>
<p>8</p> <p>9</p> <p>10</p> <p>11</p>	<p>自分の作品に必要な素材を集め、制作をしていく。</p> <p>講評会をする。</p> <p>片付け。</p> <p>まとめ。</p>	<p>生徒に道具の準備をするよう指示をする。</p> <p>クラスを半分に分け、質問する側、される側に分ける。</p> <p>環境保全についての話をする。</p>	<p>素材の使い方、色彩イメージの使用法、などに注目し、美しさに迫って行く。</p> <p>芸術活動は自然からの恩寵を受けていることを話し、環境保全につなげる。</p>